

# 『モノトーンな時代』

山口 恭弘

同い年位で馬の合った人が少なくなってしまうたが、それでも健在で三人は何時でも会えると思つて居た。が、今年はコロナウイルスの感染拡大で全く残念、一月末に集まつて以来一緒に酒は飲めなくなり、語り合うことも「又次の機会迄待つか」となってしまう。

酒と言えば、独り酒手酌酒、演歌を聞きながら：  
…否、白玉の歯にしみとおる秋の夜は独り静かに呑むべかりけり、と。先人は実に綺麗、言葉の精神作用が偉人也だ。何れはその境地に入つて見たいものだ。

現在は嫌もおうもなく家飲み主体となつてしまい、日本酒が一番美味しいのに医者はアルコールは程々に、特に日本酒はねと言う。「今どの位飲んでいますか、休肝日は設けてますか」、四週に一度の通院で必ず問われる。「週に二・三回で飲む量もビールなら二缶プラス焼酎をお茶割りで少々です。日本酒は先生に言われてから殆飲みません、月に一・二回、ワンカップ一杯です。

今は仲間との集まりも三密、四密になるのはダメと言ひ合つてるんです」

「それがいゝですよ。では何時もの薬を四週間出して置きます。来月は検査があります。」で終了した。(家に帰ったら今日は飲むか、まあ、ビールとお茶割りにするか)と車のハンドルを握りながらクリエイトカローゼン、うん家の冷蔵庫に確かある筈だ、真直帰ろう。マーケットには明日散歩のついでに寄ればいいさ。

然し家には飲み物は有つても酒の肴が無かつた。まあいゝか、ベビーチーズでビールを飲む、一寸一息つく。メ鯖は何時終わったか記憶は定かでない、あれは「みなせ」87号の駄文に目を通して居た頃だな。久しぶりに日本酒をぬる爛にしてぐい呑みで、TVで時代劇を観て居た時か、それ以来喰べてないな。大体前号で「薄口の猪口で焼酎を飲む姿が脳裏にある」等と書いた箇所がある。其処の行を何回か読み直し、「えっ、俺がチョコで焼酎を飲むと書いた」まさか(親父から無礼者め！と怒鳴られてしまうな)それよりも自分自

身に恥ずかしい。此れではもう当分筆を折るしかないか、書く氣力が失せてしまった。

今年は体調の変化を余儀なくされて居る。

コロナ禍でスポーツジムは閉鎖、二月半ばで通うことを中止とした。尤もハードな運動を行っていた訳ではないが、プールで泳ぐと言う行為は実に爽快であった。今は散歩程度で体調の維持を図るも戸惑う。六月には同窓会の中止、之は毎年恒例であったので残念でならないが、一切日常生活を変えることにすると腹を括った。丁度75年前、戦時中のことを思うと「贅沢は敵だ」「欲しがりません勝つ迄は」等の標語が浮かぶのは、全く以て銘すべしは、洗脳される怖しさだ。感染拡大中にGOTOKYANPEENだと、今冬はインフルエンザの流行もありやも知れぬと言うに医療体制状況等もつと具に公開すべき処、マスコミ受けしないのか、それとも後手に廻わった政府はコロナ対策同様、楽観主義で隠蔽体質と来たら始末は何うつけるのか、全く腹が立つ。何処かの知事がアラート騒ぎでイエローだ、レッドだと、サッカーの審判じゃあるまいし、政府と競って居たな。だが今じゃキャンペーンに参加したり

で嗚々情無しだ。

前述の医者に診察の終った後聞いて見た。

「先生、インフルエンザの予防注射今年は早くした方がいゝと思うんですが」

「厭まだ通達が来てないんだ、来月に入ったら分かるかも知れないな」防護服にフェイスシールドを身に着け、診て呉れているので信頼感はある、それが大事なことだと思う。

「モノトーンな時代」を書き続けて90回程になった。勿論それはKくんが主宰していた「春夏秋冬」(86号閉刊)での執筆が殆だが、今は氣力回復迄小休止、否下山した気分也。

(了)